

論文審査の結果の要旨

論文題名

王朝物語文学の研究—女房の機能から

論文審査の要旨

本論文「王朝物語文学の研究—女房の機能から」は、全三章十節、補遺三節、終章からなる。『うつほ物語』(十世紀末成立)、『源氏物語』(十一世紀初成立)、『狭衣物語』(十一世紀末成立)という物語テキストの構造を、脇役・端役、とくに「女房(貴人に仕える女性)」という視点から照射することで、物語文学の新たな系譜の確立を試みたものである。第一章『うつほ物語』論の第一節『うつほ物語』女房論は、物語前篇(「俊蔭」から「沖つ白波」までの十二卷)の「あて宮求婚譚」での女房たちは求婚者とあて宮との仲介役に徹し、どの女房がその役を引き受けるかによって、求婚者たちの格付けがなされているという。しかし、あて宮の東宮妃決定以降の後篇(「蔵開」上から「楼の上」下までの八卷)では、女房たちの役割は多様化し、実忠や仲忠のあて宮への取り次ぎ役でしかなかった兵衛の君や孫王の君は、政治的人脈作りに奔走するようになるという。第二節「蔵開」「国譲」巻の脇役たち—情報過多の世界の媒介者—では、源氏と藤氏の立坊争いを語る後篇「国譲」三巻を両陣営の情報戦と捉え、それが「靱負の乳母」「典侍」「蔵人これとは」等の女房や従者、さらには「噂」によって支えられていることを証している。

第二章『源氏物語』論の第一節「中将」と浮舟の母君—では、『源氏物語』正篇世界(「桐壺」から「幻」までの四十一帖)には「中将」という名の女房が五人登場するなかで、源氏の「お手つき女房」の中将をとりあげ、正篇最後の「幻」巻においてその中将像に焦点があてられていることに注目する。そして続篇(「匂宮」から「夢の浮橋」までの十三帖。「宇治十帖」を含む)では、かかる正篇の中将像を引きうけつつも、「お手つきの女房」としての役割をも超えて、主人の子供(浮舟)を設ける「中将の君」が登場してきているところに続篇の特徴をみている。女房をして、「生まない性」と位置づけた木村朗子氏の論(『乳房はだれのものか』、新曜社刊、二〇〇九)をふまえつつ、この中将の君は現在常陸介の後妻におさまるも、かつて八の宮との間になした浮舟を連れ子にしているのだ。この浮舟という娘がいるために、中将の君は過去(正篇世界)に拘り、受領階級の妻という現実には自足し得ないという分裂を生きることになる。その彼女がいずれ浮舟を切り捨てて、受領の世界に安住していくという経緯に、正篇世界を相対化する続篇の位相を認める。第二節「侍従」「右近」とふたりの女房—は、正篇での「侍従」と「右近」を俎上にのせ、侍従は乳母子で思慮の浅い若い女房として、右近は堅実に仕える女房として造形されているとする。そして、「宇治十帖」では、この二人が対関係をなして、浮舟に側近女房として仕えることで、浮舟をいかにして死へ追いやっているかを論じている。とともに、この二人の女房がいかに正篇世界の侍従や右近の造形を継承しているようでありながら、実は彼らとは似て非なる者であり、そこに続篇世界と正篇との断絶を認めている。彼らは正篇の彼らと比べて、身分も落ちるし、そもそも浮舟付きの侍従は「よそ人」であり乳母子ではない。第三節

「弁」と弁の尼」は、正篇に登場する三人の「弁」を俎上^のにのせ、彼らは主人公たちの秘め事に係わる側近女房でありつつ、その役に徹しきれないものとして設定されているとし、そのうえで続篇の「弁の尼」を問題とする。柏木と女三の宮との密通には、小侍従(女三の宮の乳母子)と弁の尼(柏木の乳母子)とが関わっていたが、続篇世界では、弁が生き残り薫に故柏木の話をし、薫や宇治姉妹のために大いに活躍するも、結局は正篇同様に主人たちの「後見」たり得ていないという。第四節「源典侍と弁の尼」は、正篇の源典侍と続篇の弁の尼という二人の老女房をとりあげて、語り手女房論を試みている。

第三章『狭衣物語』論の第一節「飛鳥井女君物語の〈文目^{あやめ}〉をなす脇役たち」は、飛鳥井女君と狭衣との恋は互いに素性を隠して始まり、女君の死という結末を迎えるが、そうなったのも、周囲に配される飛鳥井の乳母や道成・道季兄弟たちが互いに情報を交換しなかったがためであるという。第二節「女二宮周辺の女房・女官」は『狭衣物語』の女二宮物語論。まず女二宮と狭衣との関係は女房が介することなく成立する。そして中納言典侍は二人の関係に気づくも女二宮の懐妊は知らず、一方の出雲の乳母は女二宮の懐妊を知るも、相手の男が誰か解らず、しかも懐妊したのは女二宮でなく、その母大宮であると偽装する。かくして生まれた子供は大宮と嵯峨帝の子として世間に公表されることになるのだが、まさにそれは典侍と出雲の乳母とが情報を交換しあわないがための結果であるという。しかも狭衣と女二宮の関係の成立に誰も関与していないにもかかわらず、登場人物たちは昔物語を引き合いにだして、誰か女房が手引きしたのではと疑っている。女房たちのネットワークが幾重にもそれらしくはりめぐらされているのに、それらが実質機能していない物語であるという。第三節「一品宮物語と『源氏物語』夕霧巻」は『狭衣物語』の一品宮物語における『源氏物語』引用の実態を問う。狭衣と一品宮との結婚は、当人たちが望んでいないにもかかわらず、「噂」によって、二人の関係が既定の事実として扱われたことによる。千野氏はここに『源氏物語』「夕霧」巻の夕霧と落葉宮の恋物語の引用を認める。そもそも一品宮も落葉宮も、結婚することのゆるされない聖なる皇女だが、このあり得ない結婚を可能にするものとして、噂がともに機能しているという。一方、『源氏物語』では、落葉宮と夕霧との関係は噂と一条御息所の手紙という二重の手段により既定の事実と化しているが、『狭衣物語』では、噂一つで狭衣の思惑をねじ伏せるかたちで事が運ばれているとする。その噂が事実と違うことを狭衣は手紙で証明しようとするが、手紙は噂を打ち消す効力を発揮し得ないという。狭衣に不本意な結婚をさせるという状況を構えるにあたり、「噂」というパロールにすべての責任を負わせるのが『狭衣物語』の方法だとし、ここに『狭衣』における、パロール/エクリチュール、という問題域の所在を見通している。第四節「女二宮物語・一品宮物語と『源氏物語』」は、女二宮物語と一品宮物語の対応構造を確認したうえで、そこに『源氏物語』がいかに絡んでいるかの引用論。

補遺「王朝物語論」の第一節「漂流譚—『うつほ物語』を起点に」は、遣唐使は承和三年(八三六)の第十九次の派遣をもって最後となるが、『竹取物語』『うつほ物語』『浜松中納言物語』『とりかへばや物語』にみられる渡唐譚を検証することで、平安時代の物語文学にも、この遣唐使の悲惨な歴史の残響があると論じる。第二節「『狭衣物語』と陸奥の合戦—飛鳥井女君物語から」は、『狭衣物語』にみられる「陸奥の国に将軍」「荒るる夷」「衣の関」という表現に、東国を舞台とした前九年合戦(一〇五—一〇六二年)の痕跡を認めつつ、一方でそのような世界を物

語が正面から語ろうとしない点に、『狭衣物語』という物語世界の外縁をみる。第三節「『狭衣物語』における「物語」は、『狭衣物語』の先行物語の引用方法を検討する。物語名の引用はわずかで、作中人物名の引用となっている。それはたとえ物語テキストからの引用であろうとも、過去に実在した人物についての言及であるとの建前をとっているからとする。一方、書かれたテキストからの引用が明示される場合は、「……日記」という体裁をとっており、ここに『狭衣物語』の物語観があると問題提起している。

平安時代の物語文学は、男女の主人公たちの周縁に多くの脇役・端役たちを配している。しかも彼らなくして物語世界は成立し得ないことから、その重要性に着目した「女房」論は少なからずある。そのようななかにあつて、本論文がいかにかに独創的であるかを以下述べていきたい。第一章の研究は、『うつほ物語』の女房について総体的な把握を試みたものであり、とくに源氏と藤原氏の立坊争いという政治闘争を語る後篇世界を、「情報戦」と位置づけ、それが女房や従者たちにより担われているとする指摘は評価される。物語の後篇は最近ようよう注目されるようになったが、このようなかたちの後篇理解は初めてのことであり、かつ女房論の始発に『うつほ物語』をおくことの有効性も納得された。

第二章では、『源氏物語』の女房名に共通した意味があることを明確にした点が評価される。「中将」「侍従」「右近」「弁」等という召名が、それぞれ一定の人物像を含意しているとの指摘は部分的にはあつたが、本論文により初めて体系化された。千野氏は『源氏物語』に限定してこの問題を扱っているが、他の平安時代の物語群にまで視野を広げるとどうなる結果になるのか。また、女房という存在形態とは何かを最終的には問うべきである。光源氏について多くの呼称が使われようとも、それらは同一人物を指示する固有名である。一方、「中将」という同一名の女房は何人もいるのであり、にもかかわらず、そこには共通した人物像があるという。となると、このような女房という存在、さらには女房名とは何かは自ずと問題になる。また、この第二章では、中将の君という子供(浮舟)を生んだ女房に着目することで、『源氏物語』続篇論の決定打ともいふべき新たな視角を提示している。とともに、であるからこそもう少し論を展開させてほしい。そもそも平安時代に実際に生きた女房たちの性が「生まない性」ということはなく、にもかかわらず多くの物語文学において、彼らが生まないと設定されていることの意味とは何か。それをふまえての続篇論である。思うに、正篇世界では、受領層なるものが時に話題となり、受領の北の方に身をおとした等という話が披露されることもあるが、それらは都からみた周辺世界の動向以外ではない。しかし、続篇では、都への復帰願望を抱きつつける中将の君の存在が端的に意味しているように、周辺から中心を対象化するという逆の動きが萌しているのではないのか。このことは中将の君にとどまらず、常陸介・左近少将・横川僧都の家族……という続篇世界を彩る多くの登場人物の問題でもあり、千野氏にはさらなる続篇論を期待したい。第四節では、弁の尼と源典侍との関係を俎上にのせて、語り手としての女房を論じているが、本論文のテーマからすれば、第一節と第三節で中将と弁とを論じたのだから、弁の尼と中将の君の関係をとりあげるのが筋であろう。宇治十帖の世界には、右近と侍従という対関係とともに、八の宮をはさんでこの二人が対している。薫と匂宮、大君と中の君という主人公たちの対関係とともに、女房たちも対で登場していることの意味は何か。

第三章では、いかにも『狭衣物語』らしい女房の機能を明らかにしており、先の「中将の君」

論を含めて、本論文のなかでもっとも高く評価される場所である。『狭衣物語』というと、『源氏物語』の垂流文学という位置づけが一般的だが、本論文を読むと、『狭衣物語』にはそれ独自の方法があると知れる。とともに、この『狭衣物語』の物語史的な位置づけが最後になされていない点物足りない。それをしないと、『うつほ物語』→『源氏物語』→『狭衣物語』、という系譜をたどってきたことの意味が生きない。『狭衣物語』の女房というのは、従来の物語の女房の機能をふまえつつも、結局は機能不全に陥っている点に、『狭衣物語』の物語文学の終焉たる所以があるということか。このあたり、千野氏には明確に論じていただきたい。また、『狭衣物語』における『源氏物語』引用を論じた研究は多くあるも、「夕霧」巻との関係を見たものは皆無であり、この発見は評価できる。が、それにしてもなぜ「夕霧」なのかの疑問は残る。『源氏物語』のなかでも地味な巻であり、人気のない登場人物夕霧であるにもかかわらず、そこに着眼した『狭衣物語』の批評性とは何か。さらにまた、書かれたテキストではなく、「噂」にすべての咎を負わせる『狭衣物語』におけるパロールの位相とは何かという問題もある。そして、そのことと補遺第三節での「書かれた物語」からの直截引用であることを伏せるという方法とがどう関わるのか。因みに、この補遺の部分は本論文のテーマに即していないように見えるが、そうではない。主人公ではなく女房や従者に拘り、『源氏物語』中心主義ではなく『うつほ物語』『狭衣物語』にも目配りし、しかも物語の前篇や正篇ではなく「後篇」「続篇」の方を評価している、というところをみれば、千野氏がなぜこの補遺で、遣唐使時代の残響や前九年合戦の痕跡という物語の外縁に目を凝らさんとしているのかも明らかである。

本論文は、女房の物語文学論的機能を明らかにし、物語文学史の系譜をも通覧し、また個々の物語の読みをも一段と深めている。しかも論旨は明解で、余分な叙述は何一つない。千野氏には色々と注文をつけたが、それというのも本論文がこれまで看過されてきた多くの問題点を摘出しているがゆえのことである。以上をして、千野裕子氏の論文が博士（日本語日本文学）の学位にふさわしい業績であることを審査員全員一致で承認した次第である。

以上

論文審査主査 神田 龍身 教授
兵藤 裕己 教授
土方 洋一 特別非常勤講師
(青山学院大学教授)